

環境研究活動の紹介

● ブドウ属植物を中心とした野生資源植物の研究

農学部 応用生物科学科 望岡 亮介 教授

日本には 15 種類の野生ブドウがあり、冷涼な地域を好むもの、温暖な地域を好むものなど様々です。しかしこれらのブドウは日本全国に均一に生えているわけではありません。中には限られた地域にしか生えないものもあり、個体数が少なく絶滅が危惧されているものもあります。私たちの研究室では、これらの野生ブドウの調査と繁殖技術の研究を行っています。そして野生ブドウを遺伝子源として、機能性成分を有する新品種の検討も行っています。



この研究の難しい点は、時間がかかることと個体差の考慮です。新品種の開発には、ブドウの成長を待たなければならないため通常 3 年ほど時間を要します。最初の年は果実も少なく、加工できるだけの果実がなるまでには 10 年かかることがあります。新品種のブドウ「香大農 R-1」を使った香川大学ブランドとして販売しているワインなどもありますが、これも種苗登録までに 17 年ほどかかりました。そして野生ブドウは同一の種でも 1 株ごとに形質の個体差が大きく、どこまで集めて研究すれば良いかを考えなければならない一方で、個体数の少ないものは採取も慎重に行わなければなりません。



新品種ブドウ「香大農 R-1」

難しい点もありますが、本研究は環境への貢献の面でも重要な役割を担っていると思います。ブドウは太陽光を浴びることで果実が色付きます。つまり、ブドウが生えているのは森の縁などの光が当たる場所です。そういった場所は道路などの土地開発の対象となり、ブドウの蔓が邪魔とされて切り取られてしまいます。一方でブドウが生態系の中では動物の食糧源となることや、人にとってもブドウの機能性成分を活用した商品ができるメリットもあります

す。この商品化によって地域経済の活性化への貢献もできていると思います。ブドウの種の保存の観点のみならず、こうした理由からブドウを保護していくことに意義があると思っています。私たちの研究室では、ブドウの自生地である森の環境保全を推進する活動も行っています。

今後もブドウの繁殖技術の向上や、機能性成分を有するブドウの新品種を開発し、ブドウ、環境、人に役立つ研究を進めていきたいと思います。ブドウの繁殖は挿し木でも可能ですが、挿し木ではクローンを増やしていくのと同じで、ブドウが末永く残っていくために多様性に繋がるよう、種子で繁殖できるまでブドウの個体数を増やしていきたいと思っています。



香川大学ブランドワイン
「ソヴァジョーヌ・サヴルーズ」